



喪の寄り道 2010 絹本着色 181×165cm

松井冬子は、伝統的技法と現代的なテーマを融合させた独自の画風で、日本の現代美術における最も魅力的で示唆的な画家の一人としての地位を確立してきた。松井の作品は日本と西洋の双方の美術のイコノロジーを取り入れているため、初の海外個展でヨーロッパの観客がどのような反応をみせるのかも興味深い。松井は日本画の技法で大きな賞賛を得ているが、一方で、その絵画の謎めいた不思議なテーマは多くの人を困惑させてきた。松井にとって日本画は単なる技法にすぎないが、作品の主題は松井の心の奥深くに入り込んで複雑怪奇な世界を生み出し、観る者の心をかき乱す。

今回の個展では、新作の絵画5点と大型デッサン1点のほか、旧作の絵画3点とデッサン4点も展示される。新作の絵画にはより落ち着きがあり、旧作ほど挑発的ではなく、色彩にもさらなる均一性があるという印象を受ける。これらは、じつくと眺めた後に自分なりの解釈を少しずつつくり上げるといって、細やかな鑑賞が必要とされる。

展示作品には、幽霊のような姿を描いた《夜盲症》(2005)、そして代表作《浄相の持続》(2004)の2点の旧作を新たに描き直した作品も含まれている。しかし、新作の《浄相の持続》はサイズが小さくなっており、原作よりも身近に感じられるため、観客はいっそう「覗き魔」的な立場に立たされる。西洋人の観客なら間違いなく、のどかな風景のなかで地面に横たわる、傷ついた女性の死体を描いたもうひとつの傑作——マルセル・デュシャンの《(1)落下する水(2)照明用ガス、が与えられたとせよ》(1968)——を思い起こすだろう。

この作品は、ガエターノ・ズンボヤクレメンティ・スシー



# 松井冬子 パリで新作個展

## 殻からの脱出……

フィリップ・コドニエ 文

現在、パリのギャラリーダエンで松井冬子の海外での個展が開催中だ。東京の成山画廊とのコラボレーションにより実現した展示は、パリで長年活躍する写真家、SATOSHI SAÏKUSA が新しく開いたギャラリーで行われる初の展覧会となる。松井の作品世界は、ヨーロッパの人々にどのように受け止められたのだろうか。



Bridge the  
**Design & Art**  
Summer Campus

Part1 7月

26(月).27(火) 【開催時間】 11:00  
28(水).29(木).30(金) ~16:00

【主な科目】  
グラフィックデザイン・イラストレーション・  
絵本・マンガ・インダストリアルデザイン・イ  
ンテリアデザイン・デッサン・油彩画・保存  
修復・中国水墨画など、全34科目をご用意  
しています。

**申込みは  
コチラから!!**

学校見学会・体験入学の  
参加申し込みの他に学科  
ブログも毎日更新中!!  
詳しくは <http://to-bi.ac.jp/m/>

学校見学会

7/24(土).31(土) 午前の部:10:00~  
午後13:30~  
※平日も随時受付中。

- 設置学科
- 保存修復科 (昼4年制)
  - 絵画科 (昼2年制/夜1年制)
  - 中国水墨画科 (昼2年制)
  - クリエイティブデザイン科 (昼4年制)
  - グラフィックデザイン科 (昼2年制/夜1年制)
  - イラストレーション科 (昼2年制/夜1年制)
  - マンガ科 (昼2年制/夜1年制)
  - インダストリアルデザイン科 (昼2年制)
  - インテリアデザイン科 (昼2年制)

学校法人  
専門学校  
**東洋美術学校**  
TOYO INSTITUTE OF ART & DESIGN  
〒162-0067 東京都新宿区富久町2-6  
TEL:03-3399-7421(FP)  
Mail:info@to-bi.ac.jp  
URL:www.to-bi.ac.jp



右——正面が《従順と無垢の行進》(2010)。  
左壁には新作の《夜盲症》(2010)  
左——健全な自己治療の方法 2010  
絹本着色 134×50cm

めには、若干の攻撃性を持つことが最善の方法かもしれないと語っているようだ。また、スフマートを用いて描かれた、ぼやけた、あるいは霧のかかったような背景

は、見かけ通りのものなど何も存在しないのかもしれないという印象を与える——黒は白かもしれないし、白は黒かもしれない。すべては見方次第なのだ……。

新作の絵画の最後の一点は、松井の写実的な表現方法から離れて象徴主義の世界に入り込んだことで、大きく異なる画風の作品となっている。《従順と無垢の行進》は一見、観客自身の心が投影される一種のロールシャッハテストのような、抽象的な絵画のように見える。松井は、この作品の軸対称性は鏡の概念によるもので、同じことを繰り返してしまいう強迫行為



FUYUKO MATSUI  
....Solo Exhibition  
in Paris

こといった巨匠が18世紀に制作した蠟細工の解剖学模型《解体されたヴィーナス》を題材としている。とくに「L'âme au corps」展(1993年、パリ、ジャン・クレア企画)や「Spectacular Bodies」展(1999年、ロンドン、マーティン・ケンプ企画)の開催以降、こうした解剖学模型は欧州では割合よく知られた存在であることに触れておくべきだろう。このため、日本と比べればヨーロッパの観客がこうした解剖画から受ける衝撃は明らかに小さい。

ヨーロッパでの反応は?

新作の絵画《喪の寄り道》の核心をなすのも、腹部が開かれ内臓がむき出しになった状態で地面に横たわっている女性の姿である。しかし、全般的な雰囲気は松井のこれまでの作品とは大きく異なる

る。全体を通じて感じられるのは悲しみであり、色彩は茶色と灰色のやや単調な色合いで、黒煙が邪悪な魂のごとく天に立ち上っている。人体と自然の要素の間には対立も対話もなく、むしろ調和——死における調和——がみられる。作者自身によれば、この作品には、木や動物、花などあらゆるものが死にかけている死の世界が描かれているという——女性の死を悼むことは耐えがたく、世界全体の死のみが唯一の問題だともいうように。愛が枯渇してなんの価値もなくなった世界には、生命も一切存在しないはずなのである。

一方で、色彩や画風は似ているものの、《健全な自己治療の方法》は、まったく趣を異にした作品だ。皮肉な題名と、まるで嘔みついてきそうな、あるいは観る者をあざ笑うかのような、やや攻撃的な花は、正常な状態に戻り自身を確立して規範的な社会に立ち向かうた



### 松井冬子展

ガラリダエン  
6月17日～10月30日  
新作の絵画5点と大型デッサン1点、旧作の絵画3点とデッサン4点が展示された。この全作品(絵画およびデッサン)の大型の複製版に加え、南條史生、クリスティーン・ビュシエグリュクスマン、フィリップ・コドニエによる解説を収録した限定版カタログ(仏語版)が9月1日に刊行される。  
17 rue Guénégaud, 75006 Paris  
<http://www.da-end.com>  
[日本での連絡先]  
成山画廊  
東京都千代田区九段南2-2-8  
松岡九段ビル205  
<http://www.gallery-naruyama.com/>



引き起こされた不足あるいは過剰 2006 絹本着色 202×66.5cm

と、狂気への道筋を象徴するものだと説明する。しかし、この作品を注意深く眺めると、子宮のかたち、そしてその下には外陰部が見えてくる。これは辻褄が合わないわけでもない。アルゼンチンの偉大な作家、ホルヘ・ルイス・ボルヘスは、もともと有名な短編小説『トレイン、ウクパール、オルビス・テルティウス』(1940)で、忘れられた想像上の文明を描いているが、この文明では「鏡と性交は、人間の数を増やすゆえに忌まわしい」とされていた。そう考えれば、松井のこの作品は、繁殖するという人類の強迫行為に疑問を投げかけているのかもしれない……。

松井の作品に対するフランス人の反応は、全般的に極めて良好だ。フランス人は松井の絵画に興味をそそられ関心を抱いているが、おそらく日本人ほどの衝撃を受けることもなく、たとえ困難であつても作品の意味を理解することにより前向きだ。数多くみられる西洋のパロック美術との関連性はわかりやすく、また、興味深いことに、フランス人は直接的な説明をさほど好まない。フランス人は、自らの目で確かめて自分の意見を確立し、さらには自分の感情を投影して新たな意味合いをつくり上げることさえ好むのである。難しさや曖昧さはなんら問題ではない。1990年代に、漫画の影響を強く受けた制作活動の草分け的存在となった村上隆や奈良美智は、いまだにヨーロッパで人気がある。しかしヨーロッパの美術専門家は、日本には村上や奈良の芸術以外のものがあることを知って、喜ばしく思うことだろう。

#### PROFILE

フィリップ・コドニエ

FUYUKO MATSUI  
……Solo Exhibition  
in Paris